

新約聖書とその思想 —政治思想の観点より (2)—

S. Ashina

オリエンテーション

<本演習の意図と目的>

新約聖書は、キリスト教思想の基盤であり、キリスト教思想研究を志す者には、一定程度以上の聖書原典を読む能力（語学・聖書学・聖書神学など）が求められる。本演習ではギリシャ語原典の講読を通して現代聖書学の基礎の習得を目指す。

本年度は、多岐にわたる新約聖書の思想の内から、政治思想に関わるテキストを講読する。特に、パウロ書簡（ローマの信徒への手紙）を中心に、聖書テキストに即して思想へと迫ることを試みたい。本演習では、各種の辞書の使用法から、聖書注解書の扱い方といった、聖書テキストを読解する上で必要となる基礎的作業の習熟を目指す。

また、パウロの政治思想の理解を深めるために、Richard A. Horsley (ed.), *Paul and the Roman Imperial Order*, Trinity Press, 2004. (あるいは、宮田光雄『国家と宗教』岩波書店、第II部)の講読を並行して行う予定である。受講者には、ギリシャ語原典の読解のほか、このテキストの読解が求められる。

受講者には、ギリシャ語初級文法を習得していること（必要があれば、個別的に相談）が求められる。

<テキスト・文献>

1. Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, Deutsche Bibelgesellschaft, 27. Aufl, 1993.
2. Gerhard Kittel und Gerhard Frierich, *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament*, Kohlhammer, 1933-1973.
3. C.E.B. Cranfield, *The Epistle to the Romans* (ICC), T & T Clark, 1975.
4. Cristina Grenholm, *Romans Interpreted. A Comparative Analysis of the Commentaries of Barth, Nygren, Cranfield and Wilckens on Paul's Epistle to the Romans*, Almqvist & Wirsell International, 1990.
5. Jacob Taubes, *Die politische Theologie des Paulus*, Wilhelm Fink Verlag, 1993.
ヤーコプ・タウベス『パウロの政治神学』（高橋哲哉・清水一浩訳）岩波書店、2010年。
6. Giorgio Agamben, *Il Tempo Che Resta. Un Commento alla Lettera ai Romani*, Bollati Boringhieri, 2000.
ジョルジョ・アガンベン『残りの時——パウロ講義』（上村忠男訳）、岩波書店、2005年。
7. 宮田光雄『国家と宗教——ローマ書十三章解釈史＝影響史の研究』岩波書店、2010年。
8. スラヴォイ・ジジェク『脆弱なる絶対——キリスト教の遺産と資本主義の超克』（中山徹訳）青土社、2001年。
9. アラン・バデイウ『聖パウロ——普遍主義の基礎』（長原豊・松本潤一郎訳）青土社、2004年。
10. Richard A. Horsley, *Paul and Empire. Religion and Power in Roman Imperial Society*, Trinity Press International, 1997.
11. Dieter Georgi, *The Opponents of Paul in Second Corinthians. A Study of Religious Propaganda in Late Antiquity*, T & T Clark, 1987.

<演習予定>

10/4, 11, 18, 25, 11/1, 8, 15, 22, 29, 12/6, 13, 20, 1/10, 17, (24)

1. オリエンテーション・打ち合わせ：10/4
2. 基本箇所読解 (Rom., 1Pet.) + 注解書 (バルト『ローマ書講解』第2版)
3. 研究文献 (7・第II部) → 分担し発表する。

<政治神学の射程>

1. 栗林輝夫「帝国論の中のイエスとパウロ——組織神学からのコメント」(日本基督教学会シンポジウム「イエスからパウロ?」、立教大学、2010/9/18)
 - ・帝国論の新たな展開、アメリカ、神学、聖書学、宗教学、政治学などの諸分野
 - ・アメリカの聖書学会 (SBL) の「聖書と帝国」分科会 (*The Bible and Empire Unit*)
パウロ・ルネサンス、イエスからパウロへ
2. 現代思想におけるパウロ
 - 古代の歴史的思想的文脈におけるパウロ
 - ユダヤ思想の文脈におけるパウロ
 - 聖書学的議論 (従来の閉鎖的な議論に対して) への新たな問題提起
3. 「政治神学への向けたパウロ」あるいは「パウロから政治神学へ」

<新約聖書の国家理解>

1. 単一の国家論を導き出すことはできない。
 - 古代キリスト教：迫害から国教化へ、敵対から協調へ。
2. イエス：論争における国家への言及→多様な解釈が可能、政教分離? (マルコ 12.13-17)
3. ヨハネ黙示録：迫害下の教会 → 国家との敵対関係 (黙示論 13-14)
4. パウロの意義：市民社会のキリスト教、国教化以降の状況との合致 (ローマ 13)
5. 迫害 (規模も期間も様々、棄教者の問題)
 - 66：ローマの大火、皇帝ネロによるキリスト教迫害。 第1次ユダヤ戦争(66-70)
 - 95 頃：ドミティアヌス帝時代のキリスト教迫害。 第2次ユダヤ戦争(132-135)
 - 249：デキウス帝の迫害
 - 303：ディオクレティアヌス帝、キリスト教を迫害。
6. キリスト教の公認と国教化
 - 313：ミラノ勅令 (コンスタンティヌス大帝)
 - 325：ニケア公会議 361：背教者ユリアヌス帝即位。
 - 381：コンスタンティノポリス公会議
 - 392：国教(テオドシウス帝)

<パウロ研究・ローマ書 13 章・政治神学>

ブログ「自然神学・環境・経済」(<http://logosoffice.blog90.fc2.com/>)

カテゴリ「文献紹介・政治」

1. ローマ書 13 章問題と政治神学(2010/11/12)

キリスト教思想、とりわけ、政治神学を論じる上で、ローマ書 13 章問題は、古典的なテーマであると同時に、現代的な議論の争点でもある。現在、京都大学文学研究科では、新約聖書の演習で、パウロの政治神学に取り組みつつあるが、今週から、宮田光雄『国家と宗教』(岩波書店、2010 年)の検討に入った。本書は、キリスト教思想との連関において政治思想・政治哲学に長年取り組んできた宮田氏の一つの到達点とも言える労作である(「今回の本書は、私のこれまでの《国家と宗教》問題に即した政治学的・神学的な学際

研究の成果とあわせて、いわば三部作の最終巻ともなるものである。「あとがき」526頁より)。

11月11日の演習で扱った「はじめに一問題の所在」において印象的だったのは、「長いあいだ、国家形而上学の聖書の典拠として、また民衆の無条件服従を求める規範的根拠として一面的に解釈されることが多かった」この「ローマ書十三章」(4)について、近年の聖書学では、「政治的コンテクストに即してとたえようとする議論が」「北アメリカにおいて盛んになってきた」(7)との指摘である。これは、宮田氏が、指摘する「第三の探求」や「パウロと政治」グループの動向、注の10、11に挙げられた、Richard Horsleyの著書・編著や、タウベスやゲオルギスらの研究動向において確認することができる。もちろん、これに関しては、ドイツを中心とする聖書研究とアメリカを中心とする聖書研究との対比・相違を読み取ることも可能であるが、特に強調したい点は、パウロが、現代の哲学思想において、特に政治哲学の文脈で注目されてきている点である。こうした現代哲学の文脈におけるパウロを政治的ユダヤ的な歴史的な文脈で捉えようとする問題意識は、日本にも、翻訳を通じて多く紹介されている(日本の聖書研究は、こうした哲学的パウロ論とどのように関わるのであろうか)。関心のある方は、次の著書をご覧いただきたい。

- ・スラヴォイ・ジジェク『脆弱なる絶対 キリスト教の遺産と資本主義の超克』青土社、2001年。
- ・アラン・バディウ『聖パウロ 普遍主義の基礎』河出書房新社、2004年。
- ・ジョルジョ・アガンベン『残りの時 パウロ講義』岩波書店、2005年。
- ・ヤーコプ・タウベス『パウロの政治神学』岩波書店、2010年。

2. 聖書学から政治神学へ(2010/11/28)

これまで、「政治」「政治神学」というカテゴリにおいて、文献紹介を行ってきたが、この分野における中心テーマの一つは、聖書と政治神学との関わりを問うことであった。しかし、この場合に問題となるのは、その方法論、つまり、聖書から政治神学へと議論を進める上での聖書学的な方法論である。聖書学は元来方法論的反省を自覚的に行って発展してきた学問分野であるが、これは、聖書の政治神学的・政治思想的な解釈に関しても同様である。たとえば、このテーマにおける議論(イエスあるいはパウロを国家・政治の文脈で論じる)を積極的に展開しているホースレイについて言えば、次の文献は、その方法論を示すものと言えよう。

Richard A. Horsley, **Sociology and the Jesus Movement**, Continuum, 1989.

Part I: Theissen's Sociology of Early Palestinian Christianity

1. A Sociology of the Jesus Movement
2. Method: The effects of Functionalism
3. Evidence and Arguments

Part II: Social Conditions in Jewish Palestine

4. Issues and Structures
5. Social Conflicts

Part III: Toward a Social Reconstruction of the Jesus Movement

6. The Jesus Movement in Jewish Palestine; A Provisional Sketch
7. Conflicts, Comparisons, and Catalysts

Appendix A: The Conflicting Orientations of Functionalism and the Jesus Movement

Appendix B: The Limitations and Unity of Conflict Theory

3. パウロと政治的文脈(2010/11/29)

すでに繰り返し紹介してきたように、パウロ研究において、ユダヤ的文脈と政治的文脈の重要性についての意識は近年高まりつつあり、キリスト教政治神学にとっても、その意義は無視できない。こうした研究者を代表するゲオルギの最近の研究書を紹介したい。

Dieter Geogri, **Theocracy in Paul's Praxis and Theology**, Fortress, 2009.

Chapter 1: Theocracy in Israel

The Wisdom Movement

Jewish Apocalyptic, Missionary Theology, and Gnosticism

Chapter 2: Paul and Political Praxis

The Damascus Experience: The Realization of the Conversion of God

First Thessalonians: God Joins the People

Chapter 3: Paul's alternative Utopia

Galatians: The Cross as Parody

First Corinthians: The Corporate Identity of the Christ

Second Corinthians: The Secrets of Power

Philippians: A Disguised Affront

Chapter 4: God turned Upside down

Romans: Jewish Missionary Theology and Roman Political Theology

Sovereignty and Solidarity

4. ローマ書 13 章の影響史・受容史(2011/1/1)

宮田著では、「ヨーロッパ精神史」の全体においてローマ書 13 章の解釈史を辿っており、聖書内部（第一ペテロ）から始まり、古代、中世、宗教改革、近代、現代と緻密な議論が行われた。しかし、宮田氏の関心が、「4. 二つの世界大戦」にあること、特にナチスに対する教会闘争（その連関でのバルトとボンヘッフアー）にあることは、ページ数からも明瞭である。「ローマ書十三章を歴史的に受容し継承する際に、パウロのテキストにふくまれていたものを、なお、どこまで引き出しえたかを検証し確認するための視点」（29 頁）が、ヨーロッパ精神史を見るポイントとされている。ここで問われているのは、国家の権威が「神によって」立てられたことと国家を地上の世俗的制度として相対化することとの関係理解、キリスト者の服従根拠としての「良心のため」と極限的状況下における不服従の可能性との関係理解、つまり、ローマ書 13 章と抵抗権との関連づけにほかならない。この問題連関は、古代以来、キリスト教思想が繰り返し直面したものであるが、ナチス政権下での教会闘争が現代キリスト教思想を評価する視座であることは疑いえないであろう（この著書の第二部は、「近代日本思想史」であり、ここにもう一つの視座が設定されていることも重要である）。

第 I 部の最後に「5 中間的考察」が置かれ、第一部の全体がまとめられているが、ここに宮田のキリスト教政治思想の基本的主張を確認することができる。要点は次の引用の通りである。

「原始キリスト教がその信仰告白にもとづいて政治宗教＝皇帝礼拝を拒否したことは、ヨーロッパ政治思想史の上でも画期的な出来事だった」、「良心と権力とが対峙しうることを教えた精神革命的な意味をもつ」（261）

「ローマ書十三章は、普遍的・一般的に妥当する政治的プログラムではなし、このテキストを直接的に現代国家の問題に、そのまま適用することは不可能であろう。しかし、このテキストにおけるパウロの《基本的視座》を今日の政治状況にたいして関係づけることは、決して不可能ではないはずである」(263)

「《服従》は、けっして受動的な姿勢に終始するものでも、また諦念的な態度で状況に流されるままにしていることでもありえない。むしろ、それは、政治過程にたいして自覚的・批判的に参加することにほかならない」、「パウロの言う《服従》とは、社会で行われているコミュニケーションのルールを正しく守り、コンセンサスにもとづく民主的決定をつくり出すために仕えることを意味するものとなるであろう」(264)

「ローマ書十三章から引き出される批判的な射程は、けっして小さくないのではなかろうか。それは、すなわち、現存秩序にの絶対化からも、また政治責任の回避からも免れて、終末論的自由において批判的に《真のこの世性》を生きる責任倫理としての可能性である」(265)

中間的考察からわかる宮田の主張の要点は以上の通りであるが、この中間的考察には、思想史の方法論という点からも興味深い議論がなされている。それは、本書の副題にある「解釈史＝影響史」という表現の意味である。中間的考察で論じられているように、ここで「影響史」に関連して示唆されているのは、ガダマー解釈学（理解の地平、地平融合、影響史）である。「聖書テキストの影響史は、テキストのあたえる方向とインパクトに促されて、その《自由なポテンシャル》(U・ルッツ)を解釈者が引き出す試みであり、その限りでは「テキスト自身の力の表現」とさえ言うてよい」(259)。つまり、「聖書テキストにはまだ十分に汲みつくされていない豊かな内容や要求があること」を評価しようとする点で、聖書学的方法論というよりも、思想史的方法論と言うべきものであろう（もちろん、宮田が指摘するように、P・シュトゥールマッハーが述べるように、ガダマー解釈学の意味は聖書学的にも表消されるべきではあろうが）。しかし、問題は、ガダマー解釈学に「イデオロギー批判的な機能」(260)を見ること、あるいは期待することの適否である。「イデオロギー批判」の重要性自体は別にして、この方法論的問題は、ガダマーとハーハーマスの論争との関わりにおいて、再検討を要するであろう。

5. パウロ研究と社会学的方法論(2011/1/21)

パウロ（あるいは聖書）に対して、近年、従来の聖書学を越えた広範な研究の展開が見られる。「キリスト教と政治」といった問題設定はその代表的なものであるが、こうした議論を学的に成り立たせる方法論として、社会学的方法論（社会史的）な方法はますます重要性を増していると言えよう。こうした観点から興味深い研究として、次の文献を紹介したい。

Steven J. Friesen, Daniel N. Schowalter, and James C. Walters (eds.)

Corinth in Context. Comparative Studies on Religion and Society, Brill, 2010.

I. Introduction: Context, Comparison (Steven J. Friesen)

Imparials: Greek & Roman

II. The Social and Ethnic Origins of the Colonists in Early Roman Corinth (Benjamin W. Millis)

III. Asklepios in Greek and Roman Corinth (Bronwen L. Wickkiser)

IV. The Emperor in a Roman Town: the Base of the Augustales in the Forum at Corinth (Margaret L. Laird)

V. Greek Heritage in Roman Corinth and Ephesos: Hybrid Identities and Strategies of Display in the Material Record of Traditional Mediterranean Religions (Christine M. Thomas)

Social Strata

- VI. Image and Cult: The Coinage of Roman Corinth (Many E. Hoskins Walbank)
- VII. Ceres, Kó\rho\eta , and Cultural Complexity: Divine Personality Definitions and Human Worshipers in Roman Corinth (Jurunn Økland)
- VIII. The Wrong Erastus: Ideology, Archaeology, and Exegesis (Steven J. Friesen)
- IX. Where Have all the Names Gone? The Christian Community in Corinth in the Late Roman and Early Byzantine Eras (Michael B. Walbank)
- Appendix: The Corinthian Census

Local Religion

- X. Seeking Shelter in Roman Corinth: Archaeology and the Placement of Paul's Communities (Daniel N. Schowalter)
- XI. Paul and the Politics of Meals in Roman Corinth (James C. Walters)
- XII. The Sacred Spring: Landscape and Traditions (Guy D. R. Sanders)
- XIII. Religion and Society at Roman Kenchreai (Joseph L. Rife)
- XIV. Religion and Society in the Roman Eastern Corinthia (Timothy E. Gregory)

6. パウロと政治哲学 (2011/4/1)

政治哲学を中心として、現代思想におけるパウロ論は、かなりの広がりを見せている。こうしたパウロ論の動向は、これまでパウロ研究を担ってきた、キリスト教聖書神学や聖書学にとって、いかなる意味をもつのかについて、今後十分な議論が必要になるものと思われる。しかし、ともかくも、今パウロ論はかなりホットな状況になる。次に紹介の論集は、寄稿者の面々を見るだけでも、読者に期待をもたせるものと言えよう。

John Milbank, Slavoj Žižek, Creston Davis with Catherine Pickstock,
Paul's New Moment. Continental Philosophy and the Future of Christian Theology,
Brazos Press, 2010.

Introduction

Part 1: On Paul

1. Paul against Biopolitics (Milbank)
2. Paul and the Truth Event (Žižek)
3. Paul and Subtraction (Davis)

Part 2: On the Liturgy

4. Liturgy and the Senses (Pickstock)
5. Subtractive Liturgy (Davis)
6. A Meditation on Michelangelo's Christ on the Cross (Žižek)

Part 3: On Mediation and Apocalypse

7. Thinking Backward: Predestination and Apocalypse (Žižek)
8. The Return of Meditation (Milbank)